

三木清の哲学と宗教性

著者	山中 美樹
雑誌名	修士論文要旨
発行年	2017-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00003494/

2016 年度

修士論文要旨

(演習科目 日本文化学 A 演習Ⅱ)
(指導教授 清水正之教授)

三木清の哲学と宗教性

聖学院大学大学院
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科
日本文化学専攻（博士前期課程）

学籍番号 115MC002 名前 山中美樹

要旨

「最近の禅の流行にも拘わらず、私にはやはりこの平民的な浄土真宗がありがたい。恐らく私はその信仰によって死んでゆくのではないかと思う」（『三木清全集』第一巻，364頁）。哲学者である三木清（1897-1945）宗教的な関心があることは、彼の言葉からも知ることができる。しかし、その思索の幅広さから、三木の遺稿である「親鸞」の位置付けは、今日に至るまで確定していない。その理由のひとつが、三木の持つ宗教性と彼の哲学との関係をどう捉えるかという問題にある。

本論文では、三木の思想を追うことで、三木の持つ宗教性と哲学的思索との関わりに新たな視点を見出すことを目的としている。「はじめに」では、三木の略歴と、本論文で扱う問題点を示す。第1章「三木の青年期」では、三木が自身の家の宗教である浄土真宗に対して肯定的な意識を持っていること、自身の青年期を回想する際に、当時の思想界にあった宗教への関心を思い起こしていることを確認した。「宗教」という概念は、大正期において個人の形成にかかわるものとして考えられており、三木が大学生の時に書いた「語られる哲学」には、個人との関係で絶対的なものを配置する「宗教」の特徴が表れている。

また、三木は1922年からドイツ・フランスへ留学し、リッケルト、次いでハイデガーのもとに学んだ。三木はドイツの生活の中で見た「不安」に関心を寄せており、当時の三木の書簡には「疑いや恐れ」を人間の生に欠かせないものと捉えている記述がある。この意識が三木の初期の思索に強く表れていることを、第2章「三木の初期の思索に見る人間観」で考察した。三木の処女作である『パスカルに於ける人間の研究』では、人間存在は安定しない「動性」において彷徨う「中間者」として描かれる。人間の不安として示されるものは「死の不安」であるが、それとともに三木は「宗教的不安」という概念を提示している。「宗教的不安」は、「確実なるものを求めてやまぬ者の不安」であり、パスカルの「賭」の根底とされる。

また、三木は唯物史観研究において、ソレル及びサンジカリストの革命意識をパスカルの賭に類似するもの、「高貴なるものに対する情熱」を持つものとして捉え、しかし同時にサンジカリズムは「その精神において観念的」とであると批判している。それは三木において、観念的なものを全く否定するということではない。三木は共産党への資金提供の容疑を受けて拘留された際に提出した「手記」の中で、「人間の生活」に「死という問題」がある限り宗教は無くならないと主張し、また「宗教家」として「オーガスチン」、「ルーテル」、

「パスカル」に並べて「親鸞」の名を記している。

第3章「時代の中での思索」では、社会不安が強まる中、三木が不安を脱する方法として「創造」ということを意識し、創造との関連において、宗教を文化に対するものとして論じていることを取り上げた。また、社会全体の問題の他に、相次ぐ知人の死の経験が三木にとって重要な出来事であったことに焦点を合わせた。三木は1936年に妻を亡くし、その前後にも知り合いの死を経験した。その後記された『人生論ノート』において、三木は先に死した知人と自身の死後に再会する希望をパスカルの「賭」になぞらえるとともに、「死」と「絶対的な伝統」とを密接に連関させている。そこでは三木がパスカル研究で論じた「宗教的不安」の理論と三木の経験が緊密な関係を持ち、かつ「伝統」という要素において、後の「親鸞」への筋道を作っている。

第4章では、「親鸞」について考察した。「親鸞」では、人間存在は末法思想をもとに理解され、不安は懺悔ということに関わっている。「懺悔はまことの心の吐露であるべき」であり、煩悩を捨てられない自己が「自己の真実を語りうる」には「他者の真実の心が自己に届く」必要があるとされる。この「他者」について、「親鸞」においての「伝統」という視点との関連で考察を行った。三木は親鸞にとっての伝統を「生死をかけた絶対的なもの」であり、「単に教法が問題ではなく人間が問題であった」と捉える。その言葉には親鸞に対する三木の分析のみでなく、人間存在の研究を行ってきた三木自身が込められている。

「おわりに」として、第1章から第4章までを総括した。三木の思想は時代状況とともに培われており、その思想の中心的要素に「不安」がある。「不安」は宗教性と結びついたものであって、三木の中では、特に見知った者の死を契機として表出した。「親鸞」は、ひとつには時代状況に応じた哲学的関心から記されているが、それとともに、三木の個人的な経験とも関連した死者に対する意識を持って描かれている。以上のことから、三木清において、その哲学は彼の宗教性と不可分であるという見方を、本論文の主張として結論づける。

聖学院大学大学院
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科
日本文化学専攻（博士前期課程）

学籍番号 115MC002 名前 山中美樹